



ダウンナー系美女による背徳の尻ほじり

目次

[◇ 出会い](#) [1](#)

[◇ サロン朝霧](#) [11](#)

[◇ 背徳の施術](#) [20](#)

[◇ シャワールームにて……](#) [51](#)

[◇ ベッドで……](#) [60](#)

[◇ ユイカの本性](#) [76](#)

人物紹介

朝霧ユイカ

リラクゼーションサロンを営んでいるダウンナー系の女性。
常に淡々とした態度で表情もあまり変わらないが、その本性は……。

小山直人

ごく普通の営業職のサラリーマン。
普段から大した気概もなく、
上司に怒られる日々を享受して疲れた日常を送っている。

ダウンナー系美女による背徳の尻ほじり

◇ 出会い

今日も今日とて、耐え難い上司の説教を浴びつづけたつまらない一日が終わろうとしている。

「はあ、やってらんない……」

さえない男のひとりごと。

喧噪の中で小山直人は、自分にしか聞こえない声で愚痴を吐き出した。

週末の飲み屋街、サラリーマンでにぎわう街中を泥酔状態の直人は千鳥足で歩いていた。

残業が終わり、仕事の帰りたまったストレスを発散させるため一人で居酒屋をハシゴした後あてもなくフラフラと歩き続ける。

わかってはいたが酒を飲んだ程度では、このこびり付いたストレスが抜けることはなかった。

直人の仕事は販売営業職だ。

自身にとって今の職場は軽い地獄のようなものと言えた。

追われるノルマ、口うるさい上司に汗臭い体育会系の同僚たち。

典型的なブラック企業でのこき使われる日々、こんな時代遅れの会社、給料が安ければとつくに辞めている。

ここの所、直人は常に自分にそう言い聞かせて不満に耐える日々を送っていた。

(せめて彼女でもいればマシな人生になるのかな……?)

酔いでぼやけた思考でそんな願望がわきあがる。

灰色の社畜生活でも恋人が出来れば少しは頑張れるのではないかという悲

しき現実逃避。

それが妄想レベルのありえないことだと自分でもわかっていた。前時代的な縦社会である今の会社では出会いなど皆無であり彼女どころか友人ですらつくることが難しいだろう。

とはいえそれは問題の本質ではないと薄々、自分でも気が付いてはいた。自分から求めれば今の時代、アプリやイベント参加などでいくらでも出会いなどつくること出来るのだ……。。

いまでこそセールス関係の仕事についているが、直人は昔から積極的にコミュニケーションをとりに行くような人種ではなかった。

人当たりはいいが押しに弱く事なかれ主義の指示待ち人間。

そんな男だから学生時代から女性経験もなく友達も少なかった。

つまり女と付き合うことすら難しい性格、問題の本質は内向的な自分にあるとわかっていた。

だからこそこんな奴隷のような社会人生活を享受して生活している。

成績など下の中。

営業の仕事程度では直人の性根を根本的に変えることはできないのだ。

結局、社会的に満ち足りた生活を送れるはずもなく、会社によってただただ働かされる毎日を消化していく。

憂さ晴らしといえば、今のように週末に一人で飲み歩くくらいしかない。

直人は我ながらろくでもないと分かっているにしても、中々今の生活に見切りをつけることができなかった。

「おっとっ」

視線が地面と平行にならず常に揺れた状態で、歩いているとつい足を滑らせてしまいそうになる。

体勢が崩れそうになって、思わず何かに手について立ち止まった。

(ちよっと、のみすぎたかな)

ダウン系美女による背徳の尻ほじり



明日は休日という甘えから、しこたま飲んでしまったが今更どうにかなるものでもない。

気が付くと行きつけの飲み屋からはなれて見慣れない場所まで足を運んでいる。

現状、駅の方面かさえわからない程、直人は酔っぱらっていた。
ここまで飲みすぎたのは初めてかもしれない。

冷静な判断もできずに、このまま酔いがさめるまで適当にぶらつくかと考えていると、

「……正気？」

小さな声が耳に響くと、マスクをした女性がこちらをのぞき込んでいた。
あきれたような表情なのか、どことなく冷たい半眼にみつめられる。

「んっ？」

わりと至近距離から顔を凝視されていることに驚いて、泥酔の海から直人は我にかえった。

勢いよく顔をあげると、あきれ顔で女性が腕を組んで立っている。

その女性の立ち姿が傾いて見えて、直人は自分の状態に意識をむける。

するといつの間にか看板のようなものにすがるように両手をつけて体勢を保とうとしていることに気がついた。

平均感覚がおかしく足元がおぼつかない。

どうやら、先ほど足を滑らそうとしたとき思わず身近にあった看板に寄りかかっていたらしい。

客観的にみると看板に抱き着く酔っぱらい男。

そんな情けない状態の人間に、たまたま近くにいた女性が声をかけたということなのだろう。

酔い特有の妙な客観思考メタでそんなことを考えた。

歩いてすらいない深酔いに、我事ながら驚きを感じつつも他人に声をかけられるほど酷い状態なのを自覚する。

「すみません……、大丈夫つれす」

酔った頭でも残る理性で恥ずかしく思いながら直人は反射的に謝った、が最後までうまく舌が回らなかった。

これ以上醜態をさらすわけにもいかないと起き上がろうとすると――

「つととつっつん！」

想像以上に、泥酔していた自身をコントロールできずに再び看板にしがみついてしまう。

どうやらしばらくまともに歩くことができそうにないらしい。

「大丈夫じゃなさそう」

酔いつぶれている直人に声をかけてきた女は腕をくんで観察するように、こちらを見下ろしていた。

その顔はマスクをしているのも相まって表情に乏しくみえる。感情のうかがえないクールな表情、しかしはつきりと美人であるということだけはなぜかわかった。

整った目元にキレイな輪郭、目じりに落ちる泣き黒子が大人びた印象を際立たせる。

服装は黒っぽい制服のようなものを着ており、首元にはリボンのようなスカーフを巻いている。

見た目からどこかのお店の従業員ではないかとぼんやり推察できた。

あたりを見ても普通に無関心で通り過ぎていく人々が多い中、女性はわざわざ自分を気にしてくれている。

「えっと、すいませんっ、お構いなくう」

勝手に酔いつぶれている男なんかにかまってくれていることに、正常ではない思考でも軽い罪悪感がわいた。

「はい、コレ」

しばらく看板に寄りかかったまま、酔いがさめるのを待っていると女性が一本ペットボトルを差し出してきた。

「あの…」

「飲んで」

一瞬、理解できずに目の前に突き出された市販のミネラルウォーターらしきペットボトルと彼女の顔を交互にみつめる。

「いいから飲んで」

若干語気が冷たく聞こえて、有無を言わさず顔面スレスレまでボトルを近づけられる。

予想外の出来事に逡巡した直人だったが、

「じゃあ、遠慮なく——」

戸惑いを感じつつもそれよりも圧に耐えきれずに、差し出されたボトルを受け取った。

もらったボトルに口をつけるとコクコクと一口、二口と、…飲みこむ。

するとどうやら肉体は想像以上に水分を欲していたようで急速に体温が下がっていった気がした。

約半分ほどあったボトルの水を飲み干した直人は、ぼやけた思考が微かにクリアになるのを感じて深呼吸をして気分を落ち着かせた。

「ふうっ」

酔い覚ましに冷たい水は効果的だった。

急速に体内からアルコールが中和されていくのを実感する。

一息ついた後残りの水をすべて飲み干すと、無表情でこちらを見つめる女性に軽く頭を下げた。

「ありがとうございます、本当にい」

「…別に」

飲み終えた直人の顔をチラリと見ると、女性はなんでもないとでも言うように軽く手をふった。

多少すっきりとした頭になると、見も知らずの他人に助けってもらったという申し訳なさがわいてくる。

その気持ちのまま謝意を伝えようとする、彼女が背を向けて歩き出そうとするのがわかった。

「あのっ」

あっさりと立ち去ろうとする制服の女性に直人は慌てて声をかける。

「…：…？」

「えっと水のお代とか、何か——」

怪訝そうな顔でふり向いた女性に、とりあえず何か借りをかえさなければとお返しを持ちかけようとした。

だが彼女はそっけない様子で首を軽く横にふる。

「気にしないで、お店の前に吐かれると面倒なだけだから」
表情を変えずに直人へと目をくれる。

「お店……？」

直人の疑問の言葉に、彼女の指がまっすぐこちらへと向けられる、
正確には直人が抱きかかえている看板を指し示していた。
指の先を追うように自身が寄りかかっている看板へと視線を落とす。

首をかたむけてよく見ると看板には緑色の木の葉の背景に、耳かき棒のよ
うなイラストが描かれており真ん中に被せるように、

“朝霧”との文字が入っている。

下には小さく正面の建物の方向に矢印が記されており“こちら2F”と書
かれていた。

矢印の先を目で追うと建物の階段口になっており、ほの暗い照明が灯って
いる。

上を見上げると、それは二階建ての雑貨ビルだった。

内側からカーテンが敷かれているビルの窓に文字広告が見える。

「サロンあさぎり……？」

「そう…、営業中」

簡潔にそう口にする女性。

鮮明になりつつある意識で、再度彼女を見るとその従業員らしき装いがエ
ステティシヤンの制服みたいだと気がついた。

女性と看板と建物の二階に視線を往復させると、鈍った頭でようやく言っ
ていることが理解できてきた。

雑貨ビルに入っている“サロン朝霧”なるお店。

どうやらこの場所は彼女が働いているお店の前であるらしかった。

「吐くならどこか別の場所で」

状況をようやくのみこんだ直人に、冷たいとも感じ取れる淡々とした口調
で彼女はそう告げた。

「……………」

一見突き放すような態度だが、ただ冷たいだけの女性であれば営業妨害だと言って追い払えばいいだけだ。

そっけない態度は、もしかするとお礼は必要ないという気遣いかもしれないかった。

(イイ人だ、ありがたいけど、申し訳ない)

わざわざ通りすがりの酔っぱらいに水まで提供してくれる心遣いに改めて、感謝と申し訳なさを感じた。

「じゃあ、お大事に」

用は済んだとばかりに、そう言って建物へと戻ろうとした女性を直人は再び呼び止めるように声をかけた。

「あの、ちょっと」

「……………なにか？」

めんどくさそうな態度を露骨にみせる彼女に直人は慌てて口をひらいた。

「あっえっと、今空いてますか？」

「はあ？」

直人の唐突な問いかけに、制服の女性は明らかに不審そうな顔を見せた。

「……………お店、やってるのかなって」

「……………」

彼女にとっては予想外の言葉だったのか。

値踏みするようにこちらを見つめ沈黙で返す女性に、看板の文字を手でおさえる。

「今やってるなら、ぜひ受けたいなあなんて……………」

不審がられていることを感じて躊躇した直人だが思い切って頼んでみる。

どういう店なのか詳しくはわからないがおそらくイラストから耳かきをしたりマッサージをするリラクゼーションサロン？ みたいなものなのだろう。

ちょうどいい、こんな機会でもないと自ら進んで体験することなど絶対にない、日々ありきたりな日常から抜け出したいという気持ち。なにより溜まっているストレスを解消したいという願望がわいていた。過去に何度か動画サイトでこういうお店の動画を見たことがあったが気持ちよさそうに思えた。

さらに言うなれば、一見冷たそうだが初見の酔っぱらいにここまでしてくれる女性がやっている耳かきというのに強い興味をひかれる。

「どうでしょうか？」

ぜひこの店の接客を受けてみたいと正直に頼んでみる。

そんな直人の言葉に女性は表情を硬くしたまま口をひらいた。

「ウチがどういうお店かわかってる？」

淡々とした口調で問い詰めるような質問をされる。

「いえ……」

こういう系統のお店について存在は動画などで知ってはいたが、

“このお店”については何をするのか詳しいことはわからない。

先ほども思ったがおそらく癒やしを提供するリラクゼーション系の耳かきみたいな事だと予想はつくがまったく違う可能性もあるのだ。

口ごもる直人に女性からあきれられるような視線が向けられた。

「内容もよく知らずに、酔った勢いで近くの店に入るのやめたほうがいいよ」

諭すように彼女はそう口にした。

しかし彼女のその警告のような言葉は、直人にとってはさらに受けてみたくなるという燃料にしかならなかった。

変なアヤシイぼったくり店の従業員であればそんな警告の言葉は出てこない。

ますますどんなサービスなのか興味がわいてくる。

「えっとダメですか？ 予約制なら今から予約しますし……」

普段、消極的な直人にしては珍しく食い下がるように頼みこむ。

「こーゆうお店って経験したことなくて前から興味あったんです、お願いできませんか？」

優しいけれどどこか塩対応気味の彼女への好意と、純粋な願望から直人は仕事でも見せないほど熱心をお願いした。

「営業中じゃないなら、後日でもお願いしますっ」

正直ダメ元でもいいかという、プライドを捨てるような気持ちで直人は頭を下げてみた。

するとその態度に女性は軽くため息をついた。

「はあ……」

やはりいきなりでは厳しいかと考えていると、女性が仕方なさそうにつぶやいた。

「まあ、いいけど」

予想していなかった彼女の許可に、直人は思わず顔をあげた。

(マジか！)

「あっ、ありがとうございます」

女性はマスク上の半開きの目で、直人をあきれたような目で見つめるとお店のある建物へと手をむけた。

「……じゃあ、きて」

小さなつぶやき後、すぐに階段口へと歩き出した女性の後を、直人は慌てて追いかけた。

「まあ、どうなっても知らないけど」

さらに小さな声でそう続いた言葉は直人の耳に届くことはなかった……。

◇ サロン朝霧

ビルの一階はどうやら空きテナントになっているようで明かりもついていなかった。

そこを彼女は素通りして横付けの階段を上がっていく。

直人は緊張から一言も発しないで女性の背中を無言でついていく。

彼女をみると後ろ姿を下からのぞくようなアングルになるため、あまりみないように足元に視線をおとした。

それでも下を向いた時、階段の薄暗い照明の中で浮かび上がる白い脚が目につり、思わずゴクリと生唾をのみこむ。

コツコツと階段を上ると二人の足音だけが鳴り響く。

街頭とは違いビルの中は異様に静まり返り、妙な緊張を覚える。

狭い踊り場をはさんで階段を上った先、二階に上がるとすぐにガラスドアがあり彼女は立ち止まった。

薄暗い照明の中、入り口ガラスの内側におしゃれな木枠の表札がかけられて、花模様の壁紙が中央に貼り付けられている。

その見た目でなんとなくエステやマッサージのような癒やしを提供するお店を連想させた。

(想像通りの店構えだけ……)

飲み屋街にあるお店としては、外の看板もそうだがどこか場違いな雰囲気を感じさせる気がした。

階段階下にカチャカチャと解錠する音だけが響きわたる。

手慣れた様子でドアをあけた女性の後へと続き室内へと足を踏み入れる。

「どうぞ」

女性は靴を脱いで中へ入るように指示すると入り口の鍵をかけた。

言われた通り靴を脱いでフロア内に入った直人はあたりを見渡す。

受付カウンターもないこぢんまりとした玄関口。
そこから先、廊下全体をほの暗いオレンジ色の照明が照らしている。
内装は落ち着いた洋風で統一されていた。

「こっち」

この手のお店に慣れておらず、落ち着きなく周りをキョロキョロと見渡す直人に女性は一言声をかけるとサッサと奥へと進んでいく。

玄関から狭い廊下に入ると左右に個室がならぶ。

左はドア窓の上からカーテンで仕切られており中の様子はうかがえない。

右側に洗面台がありその奥には洗い場があるのかガラス戸のドアがあった。そこを通りすぎると突き当たりの部屋へと案内された。

ドアをあけて女性に続いて中に入った直人はゴクリと無意識に喉をならした。

案内された部屋は思ったよりも広く、手前にリクライニングチェアがあり、その奥には大きめのベッドがおかれている。

ここがメインの部屋になるのか廊下の左右にあった小部屋とはあきらかに作りが別物になっていた。

無地の壁紙で装飾されるシンプルな内装。

部屋の端にはレースの長いブラウンカーテンが敷かれており、おそらく大きな外窓を隠しているのだろう。

照明は薄暗いピンク色で照らされており、この部屋だけ妖しげな雰囲気を漂わせていた。

これが耳かきや。

(なんか、思ったより……)

直人は以前に動画でみた某電気街の耳かき店の安らぐようなイメージとは違い、艶やかなムードに軽い驚きをおぼえた。

妖しげな照明とは裏腹に医務用に見えるリクライニングシートチェア。

どこかちぐはぐな雰囲気戸惑いながら、落ち着きなくあたりを見渡しているとき、

「とりあえずそこに掛けて」

女性が近くのシートチェアに腕を向けて座るように促した。

言葉にしたがって恐る恐る皮張りのシートに腰をかける。

手に持った鞆とペットボトルは女性がさりげなく受け取ると近くの丸い机台の上に置いた。

手ぶらになり角度の起き上がった背もたれに身体を預けると、フワリとちよよい反発が背中に戻ってきた。

背面を包み込むような安堵する座り心地。

感触から、かなり高価な椅子だというのがわかる。

直人は座り心地のよさに身を任せると室内に漂う微かなアロマの香りに気が付いた。

こわばった気持ちさがほぐれるような澄んだ香り。

案内されたときから落ち着かない状態が続いていたが、一息ついてようやく戸惑いや緊張感がうすれてきた。

座ってようやく気持ちに余裕ができると改めて室内を見渡してみる。

ピンクがかかった照明の室内に自分が座っているリクライニングチェアとその奥にホテルにあるような広いサイズのベッド。

壁際には複数のインテリアラックが並んでおり、様々なボトルや小瓶がおかれている。

天井をよく見るとチェアとベッドの境目にレールが付いており壁の端にカーテンが束ねられていた。

間切りのカーテンだろうか、たしかに広い部屋なのでここだとチェアとベッドで仕切って二か所で施術？ することもできそうだった。

内装だけでもかなりの金額が費やされているのがわかる。

ぼんやりとそんなことを考えていると、女性が目の前かがみこんだ。

「私、朝霧”のユイカ、よろしく」

簡潔な自己紹介のあと視線を合わせてジッと見つめてくる。

直人はようやく彼女の名前がわかり心が浮き立った。

(ユイカさん、か)

この薄いピンクの照明の中で彼女の立ち姿は気品と、どことなく色気を感じさせた。

若く見えるが年齢で言えば自分より少し年上だろうか……？

クールな表情に成熟した落ち着きを感じさせる。

しばらく見とれてしまった後――、

「えっと、小山といいますよろしくお願ひします」

直人は慌てて返事をするように自分も名を名乗った。

「……」

無言でこちらを見つめる彼女に、客が姓^{せい}を明かすのは変だったか？ と

不安を覚えていると、

「一応こんな接客、いい？」

ユイカと名乗った女性は瞬きもせず目だけを見ながらそう問いかけてきた。

無表情で返事を待つように見つめられる。

(こんな接客？ ため口っぽいことかな？)

おそらくおもてなしをするような丁寧な口調での接客ではなく、今のよう
な事務的な態度でもかまわないかという確認なのだろう。

「あ、はいもちろんです」

直人は正直に言葉を返した。

いきなり店内に入ってかしまった接客をされるより、最初と変わらない
この淡々とした受け答えのほうがちがう感じが落ち着く。

それになんとなくだが、今の態度が彼女の素顔なのではないかと感じられ
た。

ユイカはもう一度ジツクリとこちらを見て、

「……そう」

と一言だけつぶやくと視線をはずした。
ゆっくりと回り込むように直人の腰かける椅子の背後へと移動する。

「……酔いはさめた？」

「えっと……」

準備をはじめたのか背後でなにやら瓶を動かす音をたてながらユイカが問いかける。

「アルコールはだいぶ抜けてると思います……」

水ももらって飲んでから、酔い独特の浮遊感はうすれている。

思考も完全シラフとまではいかないが普段の状態に近づいている気がした。
こういうお店にはじめて入るといふ興奮が意識を少し覚醒させたのかもしれないなかった。

「特に疲れている所とかある？」

背後から聞こえてきた彼女の淡々とした質問、それは医療者の問診を思わせる事務的な響きをたたえていた。

「えっと全身まんべんなく、……後、は精^{メンタル}神ですかね、ハハッ」

「へえ」

日頃から感じている疲労を大げさに伝えると、素っ気なく言葉をかえされる。

「ハハ……」

自虐めいた笑みもスルーされて空回りしたような空気が流れる。

若干気まずさを覚えていると、背後の首あてに手が置かれる気配がした。

「メンタルが疲れているなら、まずほぐしコースがオススメ」

一言そうつぶやいた彼女に直人は内心首をかしげた。

(ほぐしコース?)

コースのオススメをされたが他にどんなコースがあるのか、料金や時間等

何一つ聞いていないのでわからない。

それとも初心者の初回はこういう時、だまってオススメに従うのが普通なのだろうか？

ただ初心者の直人にも一つだけ確認しておかなければいけないことがあった。

「えっと、そのコースだとおいくらですか？」
値段だ。

ストレートに金額を聞くというのも失礼だと思いが引けたが、料金がわからないと手持ちでは足りない可能性もある。

そうなると思礼どころかトラブルになりかねない。

「……………」

しばらく沈黙していた彼女だったが返ってきたのは予想外の言葉だった。

「料金は決めてない」

「えっと、それって……………」

「施術が終わった後に見合ったと思った額を払ってもらえばそれでいい」

「それは……………」

いくら直人がこういう場所に疎いといってもさすがにそんな店は聞いたこともない。

自分が望んで入った店なので騙されても文句は言えないが、最初から金額がわからないのはスッキリしない気分になる。

そんな直人の不満、というよりも不安を察したのか、ユイカは淡々とした声で言葉をつづけた。

「気が進まないなら今ここで帰ったほうがいい」

「頼んで入ってきたのはアナタ、強制はしていない」

まるで突き放されたと感じるような手厳しい言葉。

しかし、よく考えれば彼女の言葉は道理が通っていて、かえす言葉もなかった。

普通の店の常識を当てはめてしまった自身の考えより、お店のルールが優先される。

認識が甘かったことを自覚する。

「確認しただけで気が進まないとかまったく思っていないですっ」
「……………」

背後の沈黙に焦りを覚える。

「あっ、お願いします、あのっ、ほぐしコースで」
なにやら怒らせてしまったかもしれないと、直人は店を追い出される危機を感じて口早に彼女のオススメを指名した。

「すみません……」

「別に怒ってないから安心して」

そんな直人の焦りが伝わったのか、ユイカは一言つぶやくと手を軽く肩へと触れた。

「力ぬいて……」

肩の手をゆっくりと首スジにはわせて、ほぐすように軽くもまれる。

「あ、はい……」

ヒンヤリとした手に一瞬だけドキッと心がはねるもすぐに心地よさに変わる。

手の動きから彼女の安心させたいという気持ちが伝わって、直人はすぐに怒りは勘違いだと悟った。

しばらく、首の根本を揉みほぐされると確認するように彼女がつぶやいた。

「じゃあ、ほぐしコースでいい？」

「はい、もちろんです」

「わかった」

直人の言葉にユイカは返事をする、

「ちょっと準備するから少し待ってて」

そう言い残すと彼女は入ってきた部屋のドアから出ていった。

彼女が出ていき、直人はボンヤリと考えた。

ほぐしコースということは、おそらくマッサージでもされるのだろうか？
と……………。



部屋の外から、水音やカチャカチャとなにかを取り出しているような音がする。

静けさの中で響くそれは耳に小気味よく響く。

しばらくして小さなキッチンワゴンを押しながら彼女が戻ってきた。

「おまたせ」

台の上には洗面器とタオルが数枚、しぼりたてのタオルもある。

薄暗いピンクの照明の中、微かにそのタオルから湯気がたっているのがわかる。

他にも何か数点あるがタオルが上から被せてあり、下に何があるのかは、わからなかった。

「じゃあはじめていく、全身を椅子に預けて」

つぶやいた彼女の手からしぼりたてタオルが広げられると、直人の視界をふさぐように顔へと近づく。

チェアの背もたれに頭から背中まで身をまかせると、目にタオルが押し当てられた。

ほっとするあたたかい心地よさが目元を中心にジンワリと広がっていった。仰向けになり視界が暖色の薄暗さへと変わっていく、当てられたタオルから微かにアロマの香りが漂ってくる。

ふんわりとした甘いニオイ、安心する温かさに眠気が訪れる。

すると耳元に落ち着いた声が響いた。

「一度深呼吸してみても、はい吸って〜」

肩に手を置かれながらささやかれる、自然とその言葉に従い息を吸う。

「……………はい吐いて、……………もう一度吸って……………」

ユイカの言葉に誘導されるように深呼吸を行う。

「吐いて〜、吸って、吐いて、吸う、……………いいね」

なんの疑問も感じずに、しばらく言うとおり深呼吸を繰り返していく。

何度かの深い呼吸をすると意識は完全に彼女の言葉に集中するようになって

た。

「まず頭から力を抜いていこうか、」

「そう……、流れるように耳の後ろから」

(声、すごくいいな……)

低い声の女性独特の安心感が直人の身を包んでいく。

「首、肩、腕、続いて腕先まで脱力しよう……」

低く落ち着いた脳まで響くような声でささやかれ身体が言葉に添うようにゆるんでいく。

「そのまま胸からお腹、下半身まで余計な力が抜けていき——」

どこからささやかれているのか、まるで脳内に直接語りかけられているような不思議な響き。

「はい次は股間、腰、お尻、太モモもダラントとおりる」

「ヒザもふくらはぎもシートに沈んでいく」

「足首もそう……つま先まで力が抜けて」

言葉に従い肉体から力を順に抜くと思考がさらにぼやけていった。

「……全身がゆっくりと沈んでいくよ」

ベッドが柔らかくなり、まるで埋もれていくような感覚。

「キモチいいあたたかさに包まれて肉体ぜんぶ筋肉も神経も血流もすべてがユルユルにとけていく……」

リズムをもって語りかけてくる一言、一言が心地よく耳に流れこむ。

言葉に従って身体のコからとけるようにあたたくダレていく。

「いいわ、力と一緒に脳の中にある余計な考えもほぐれていく……」

「心地よさ気持ちよさだけがただよって……頭がぼおっとしていく」

(なんだかフワフワしてくるな……)

まるで脳の中で漂うあたたかいモノと全身が一体化するような、自身がバターののように液状にひろがる心地よさ。

体験したことのない感覚の中、直人の意識はぼやけるように薄まっていく。「それほど……、ゆるんでそのまま私の言葉に従うと——、心地よさがあふれてくる……」

自己の意識がほどけるような感覚の中、耳に落ち着いた音色が流れ続ける。「そのままゆっくりと身体と手が持ち上がる、そう、そう声のままに肉体が動いてイク……」
薄れた意識の中、まるで何かに操られるように身体が動いているような気がする。
続けて上半身から服が脱がされていく感覚、下半身も——抵抗なく——、そのあたりで直人の記憶が途絶えていった……。

◇ 背徳の施術

(あれ……?)

直人はウトウトとした心地よさから意識が少しずつ目覚めて、ぼやけた視界が鮮明になっていく。

どうやらいつの間にか完全に眠ってしまったようだった。

肉体はリラックスを好むように力が抜けたまま仰向けのままだ、

目の上のタオルが外されて視界には天井とカーテンレールが見える。

室内は薄暗くカーテンが閉められて個室のように仕切りがされていた。

そんな中、身体の下の方ではチャプチャプと静かな水音が響いている。

全身に感じる肌寒い感覚。

肉体が何もまともっていない状態になっていることに気がついた直人は思わず身を起こそうとした。

(は、裸???)

いつの間にか全裸になっている自分に意識では驚きつつも、肉体が心地よさを求めているのか反応できないでいた。

(え、動けない……)

視線だけを寝そべる首の下へとうつす。

「起きた?」

するとエステ服を着たユイカがチェアシート脇に立って、こちらを見つめながらそうつぶやいた。

直人の両足の間に置かれているピンクの洗面器に、青いゴム手袋をつけた細い腕が入り水音をたてている。

「あの、これは……」

「……………」

問いかけた直人の視線の先でユイカは無表情で透明なボトルを手に取ると面器にその中身である粘液を垂らしていく。

さらにまぜるように片手でかき回すとチャプチャプクチュクチュとボウル型の面器から淫猥な音がした。

チェアベッドに全裸で仰向けになっている直人は自身の足が両側に開いている状態に気がつく。

思わず股間を閉じようとしたがやはり肉体は言うことを聞かず、足を動かすことが出来ないういた。

横たわる両手もダラリと垂れたまま動かさない。

全身がぐったりのまま陰部は丸見え、徐々に現実を認識して羞恥が芽生えてくる。

直人の股間の横で立っている彼女はまるで気にした様子もなく淡々と今度是小瓶のオイルを手に取って数滴、洗面器の中に落とした。

「まずはかたいトコロを色々とほぐしていく」

そうささやいたユイカが両手で混ぜ合わせたローションとオイルをすくいあげると水音をたててゴム手になじませていく。

粘液から漂う甘いローズの香りが鼻梁をくすぐる。

直人は思わず唾を飲みこんだ。

寝ている間に彼女は準備を着々と進めていたらしく、自身の身に何かが行われようとしている。

「ユイカさん、あの、何をするのか聞いてもいい、いいですか？」

恐る恐るそうたずねた直人に無表情のマスク美女が目細める。

「なに？ もちろん施術よ」

事もなげにそうつぶやくと、粘液に濡れた両手がゆっくりと股間へと近づ

いた。

「ひいやっ」

クチュリと音がなり両の太モモとその真ん中にある陰囊いんのうがぬらされる。「心も体もジックリとほぐしていく……」

男があげるにしては大げさな声を無視してユイカのローションがタップリとついたゴム手がこねるように陰部を揉み込んだ。

「ああっ、そ、そんな」

まったく予想していなかった展開。

動けない身体、男としての恥ずかしさ追いつけない感情に気持ちよさより、戸惑いが先に立つ。

目が覚めたら想像とはまるで違う痴態さらす格好に淫猥なサービスが行われようとしている。

「ここ、み、耳かきサロンじゃ……、こんなっ」

まさかこんな風俗まがいな店だったとは……、

「そんなこと一言も言っていないし、どこにも書いてないはず」

動揺する直人に淡々と答えるユイカ。

（た、たしかにそれはそうだけど……）

彼女の言うとおりに思い出せば店の窓にもサロン朝霧としかかかれておらず、強いて言うなれば看板のイラストに耳かき棒が描いてあっただけだ。

こちらが勝手に耳かき店と想像しただけで、どんなことをする店なのかは詳しくわかっていなかった。

そしてそれは、

「……私はどんな店かわかないまま入らないほうがいいって言った」

あれは彼女の忠告だったのか？

癒やしを期待してお願いしたがこの状況は……。

（な、なんか違——、あ）

「あうっ、ああっんっ」

直人の考えをよそに、ニユルニユルとしなやかな両手が太モモを撫でつつ睾丸の根元に入り込んできた。

「……たまってる」

事実を伝える事務的な口調に反して、指先は優しく丁寧に両側のタマを攪拌かくはんさせるように揉んでいく。

粘液がまぶされた睾丸がほぐれていく。その快感にゆるんだ股間からふつふつと煮えたぎるような欲情がわきあがってきた。

(き、気持ちいいのにつ、なっんで)

普通なら興奮のあまり肉体が動いたり、身体を動かせるはずなのだが、なぜか全身はぐったりと力が抜けたまま動けない。

官能だけが積もるように溜まっていく、こんなことは今まで経験したことがなかった。

(これはいったいどうなって——)

そんな疑問に答えるようにユイカが小さくつぶやいた。

「寝てる間に、勝手に力が入らないように筋肉をよくほぐしといた」

「あうっ」

思わずもれてしまう声、器用に睾丸がもみほぐされて下半身がとろけそうになる。

「しばらく自力では動けないはず」

寝ている間にそれだけの施術をする技量。

股間がとかされそうになっている今、この気持ちよさがそれを証明していた。

「いつ、イイ、けどっああ」

快樂だけを流し込まれて自らは何も出来ない、直人は強制的に受け身にされているような気分になっていた。

(キモチイイ……、いいんだけどっ)

元々の直人の望んだ癒やしとは違う快樂の性サービス。

これはこれでいいのだが、自身の肉体が動けないことが男としての不安を芽生えさせていた。

首もろくに動かせないため視線だけで股間を見ると青いゴム手袋が何かを洗うように交互に動く。

クチュクチュとした水音がなり、温かさと心地よさが下半身に流れてグツ

グツと肉玉から欲望が煮えたぎっていく。

「はあはあはあはあはあ…」

はじめて経験する睾丸責めの焦れた甘さに息が乱れて興奮が高まっていく。

そんな気持ちいい愛撫がしばらく続けられて―、

「タマだいぶ仕上がってきた、次はココ…」

「ひやっ」

片方の手指で陰囊が揉みながら持ち上げられると、その下にあるすぼまりにピトッと指先が触れた。

「えっ？」

ゴム手袋と粘液の冷えた感触が敏感な菊座を刺激する。

「ココ、興味ある？」

相変わらず感情のうかがえない尻いだ目つきで直人を見つめながら、ユイカはそう問いかけてきた。

「あ、ああっ、そこは…」

(そんなところっ)

ピタピタピタと指の腹が返事を促すように、人に触れたことのない恥ずかしいすぼまりをタップする。

一定のリズムで中指の腹がお尻を刺激しながら、肉袋を握りしめていたもう片方の手もあわせて揉み込まれる。

「そこっ、あっ、ああ」

妖しくも甘い未知の感覚に思わず声もれる。

粘液を引きながら指先が菊にくつつくたびにヒクリヒクリと穴がわななくようにひくつく。

確実にそこは期待していた。

その反応に、

「…あるみたい」

そうつぶやいたユイカの指はそれ以上言わなくても、わかっているとばかりに菊座の上でツルツルとすべる。

細いゴム中指がお尻の谷間をなぞるように何度も行ったり来たりしながら

菊門を撫でて反応をうながす。

器用で手慣れた指愛撫にほだされるように、尻穴はパクパクと反応を大きくしていった。

直人にとって生まれて初めて他人に触られる排泄器官、恥ずかしさも感じるがここがこんなにも――、

「あ、あ、ああ……」

「シワがゆるんできた……」

事実を告げる女の言葉。

陰囊を揉みながらニユルニユルと指ですぼまりを愛撫する手つきに、だらしなく上と下の口がゆるむ。

菊穴を愛でるように何度も指が優しくこする。

それでも一定のリズムを変えない浅い刺激をしばらく続けられて、直人は気持ちよさよりも、もどかしさを感じてくるようになってきた。

そのもどかしさから求めるようにお尻の穴はひくつきを何度も何度も繰り返していく。

執拗な甘いタッピングとなぞりのリピートに、

（ああっ、もうこれっ）

「あ、そこっ、も、もっど……」

思わず直人の口から、ねだるような情けない言葉がもれてしまった。

「……………」

恥ずかしさに耐えてねだった言葉に、ユイカは特に何も言うこともなく、ジイイと直人の顔を見つめた。

まるで心の中をのぞかれるように鋭い目で観察されて直人は羞恥から顔を朱く染めていく。

（うっ、は、はずかしい、そんな見てっ）

無表情で見つめる女性に思わず顔を背けたが、

次の瞬間――、

「あうっ」

ギユウウツと強く睾丸が締め付けられる。
そして、

「ダメ、ちゃんとコッチを見るの」
淡々とした冷たい言葉。

抗いがたいその命令に恐る恐る首をもどしてユイカを見る。

(うう……)

「そう……、目をみて動かない」

そらすことも許されずに赤面する直人の表情がふたたびジックリと観察される。

まるでヘビに睨まれたカエル。

主導権は彼女にあると教え込まされているような気分になる。

(な、なんでこんなことっ)

「ううっ」

ユイカの言葉に従うと陰囊への強い握りが緩んだ、そのまますぐに柔らかく揉み込む愛撫が再開される。

しっかりと目を離さずに見つめながらユイカの両手が睾丸と菊の表面をジワジワとゆるませていく。

「はあはあはあ、ああっ、も、もうそれえ」

ジツと見つめられながらの執拗に焦らす甘い睾丸揉みと、指のアナル撫でに息が乱れ、欲望がおさえきれなくなってくる。

真っ赤の顔で口を開いた直人にマスクをした無表情の女がポツリとつぶやいた。

「……ほしい？」

“なにを？”

と聞かずともわかる、菊座の周辺がピトピトと粘液と共にタップされる。指先による甘い誘惑。

欲情を抑えきることができず呼吸をあらげたまま直人はうなずくと、

「はあはあ、はあ、あ、っは、はいっ」

とねだるように返事をした。

「そう、…好きなんだおしり」

冷めた目を離さず、逃げ場を許さない淡々とした言葉でユイカが続ける。

「おしりのあな」

嘘やごまかしが一切通用しそうにない彼女の言葉に、

「ううっ、は、はいっ、…す、すきです、たぶん…」

羞恥から真っ赤になりながら直人はそう答えるしかなかった。

優しく肛門を撫でる指の誘惑に勝つことは出来ずに、先にある未知の快楽を求めてそれを認めてしまう。

そして――、

「…いいよ、あげる」

「あうっ」

平坦なつぶやきに続いてニユルリとお尻の奥に細いものが入り込んだ。

緩みきった表面の菊^{きく}皺^{じわ}をなんなくかきわけて細いモノが尻肉をなでながら埋没する。

ヒザを立てたまま足を開いた直人は、はじめて肛門に異物を入れられた感覚に思わず声をあげる。

「おっ、おっあ」

入れられた最初こそ違和感があったが、すぐにニユルニユルとかき回すように動く指の動きに気持ちよさを覚えてくる。

「あっん、ああっ、あっあああう」

もれた声もあえぎに近いものへと変わっていく。

巧みに細い指がくすぐるように奥の肉をすべり、

直人ははじめての体験にもかかわらずお尻の奥が熱くほてってくるのを感じた。

表面を撫でられるのとはまるで違う内側からのよさ。

(つつ――、なんだこれっ、こんなところがッ)

気づくといつの間にか愛撫はお尻だけになっていて陰囊に感じていた気持ちよさはなくなっている。

かわりに睾丸を揉んでいたユイカの手はみぞおちあたりを押しさえている。

その手のさらに先にはいきり立った先っぽが揺れていた。

視線を下半身にむけた直人の目にビクンビクンッと陸に上がった魚のように跳ねる肉棒の真っ赤かな亀頭。さきっぽ

お尻の穴から入り込んだ細い指に呼応するように、亀頭が跳ねて翻弄されていく。

「ああっ、その動きっ、あっ」

お尻の愛撫に合わせて感じる恥ずかしい男の姿にくぼう、その様子をジッと無表情に見つめているユイカのマスクから言葉がつぶやかれた。

「コレ……、小指がいいんだ？」

男の尻の中で小さな生き物のように器用に動かす指。

ニルリニルリとその細い小指が肉筒をかき回し、はじめての気持ちよさを与えてくれる。

直人は思わずコクコクと首を縦にふって同意した。

まさかお尻の中とペニスが快樂でつながっているとは思ってもいなかった。

この気持ちよさはクセになりそうだった。

「じゃあ、コレは？」

だがそんな気持ちよさも長くは続けられず今度は、

「あひゃあっ」

ズボッと細い指が抜かれると、続いてわずかに太い指が肛門から侵入した。

「別の指」

つぶやかれた声、中から感覚を変えた指が今度はズボズボと抽ちゆうそつ送そうをはじめた。

「あっ、ああ」

先ほどの自在にくねるような動きと違い一定のリズムを繰り返しながら深く浅く深く浅くと何度も指が肛内を行き来する。

指の腹が腸壁を乱れない間隔でこすり刺激を続ける。

しばらくしてローションが腸内へとなじむとズチズチズチュと音は水気のあるものへと変化していった。

「あっ、あっ、あっ」

「これは薬指」

まるで機械のように一定のリズムで精密な刺激を与える指。
薬指を使い抜いて入れる抜いて入れる抜いて入れる……。

淡泊とも言える動きにお尻を擦られつづけるとしばらくしてジーンッと股の根元から熱が生まれてきた。

指の先が奥にたどり着くたびに奥から睾丸へとうずきが伝わっていく。
まるで精液がソコに溜まっていくかのようにジンジンと鈍い快楽が積もっていく。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あ、あっ」

そのリズムミカルな抜きさしに浅い呼吸と共に声をだして反応していると、

「ふうん……、次」

こちらを観察しながらマスクの女はふたたびそうつぶやいた。

「あうっ」

ズボッと指が抜かれてすぐにまた別の指先らしきものが差し込まれる。

せっかくよくなりそうだったのにとと思うのも束の間。

先っぽがはいったこの指はすぐに動かずに先ほどと違いまるで堪能しとばかりにゆっくり入ってくる。

「ああああ……」

薬指と同じくらしいの太さの異物感だがジックリとひねりをくわえながら腸内に侵入していく。

さっきまでの素早い動きの後にまるで焦らすようなスローな刺激に物足りなさを感じた瞬間――、

「あっ、あぐうううっ」

奥まで到達したと思った指がさらに先ほどより奥に進み、お尻の深くまで指が埋没した。

入り口を突き上げるように指の根元が肛門をギュウウウッと圧迫する。

「ふ、ふかしい」

「そう……、これは中指、とくに私は長い」

お尻の一番奥まで突き刺さった指、ひときわ長く感じられる女の中指が直人の想像よりも深くをおかしてくる。

届かないと思っていた場所まで入り込んできた刺激に声もれる。

「ううっ、うぐう」

しばらく深いトコロまで馴染ませるように中指はジックリとその場所とどまる。

指を奥まで差し込まれながらも時間をかけて染みこんでくるような中指の責め方に段々と穴が緩んでいく。

「ぐっううっ」

ジィワツと奥が熱を帯びた。

するとその状態で指先が急にクイツと^{くわ}鉤のように折り曲がる。

「ああっ、おっそ、そこおっ」

「とりあえず第一関節だけ……曲げる」

ユイカの言葉どおり一番奥まで届いた指が器用に先っぽだけ折られると、

「おっ、おっ、おおっ」

ゆっくりとその場で左右にひねりをくわえていく。

「おっ、おっ、おっ、おおっん」

指の根元まで押し込まれながら奥の腸壁をこするようにグリグリと刺激されて直人の口から先ほどまでとは違う響きのあえぎがもれだしていた。

一番奥で折り曲げた指がゆっくりと半回転するように手首をうごかしながらユイカは冷めた視線を男におくる。

「反応イイね」

太ももから膝にかけてビクビクッと震わせながらあえぐ直人にそうつぶやくと、指をそのままゆっくりと引き抜いていった。

ズチュウウウウ、と粘液がからみつき漏れる水音。

「おっ、おっ、おっ、おおお」

腸壁が刺激されながら時間をかけて指が抜かれていきその刺激に野太い声が出る。

そして指が先っぽまで引き抜かれると、

「じゃあこれでラスト」

ユイカから簡潔な一言がつぶやかれると、

また別の指がズボッと勢いよく差し込まれた。

「おっ」

一転して勢いよく侵入してきた指、だが先ほどより深い所まで届くことなく。

スルリとなめらかにはいった感覚は異物感もあまりない。

先端にいくほど細い指だと感じられて刺激も浅いと感じたが――、

ただそれだけで終わることは当然なく、

「あっがっ」

「人さし指はもつと曲げて……」

そうつぶやくとしなやかな指がフックのように形をかえてまがりだした。

「おっ、おっおっお」

腸壁に指先が食い込むと、

「な・か・を・搔・いて・あ・げ・る」

ビニールゴムの下からでもわかるほど飛び出た爪がうねる肉壁に沈むと引っ搔くように動き出す。

「おっおっおん、おっ、おっおっ、おっ」

中でゴムが破れているのではないかと思えるほど、爪先がキリリリィと筋を残すように柔らかい肛内を引っ搔く。

指がすばまり近くまで爪を立てて引き抜かれると、ふたたびズニユリと素早く奥まで入り込む。

そしてまた、爪がたてられるとお尻の中が引っ搔かれていく。

「おっおん、おっおっおっおっそ、それえっ」

今までのどこか手加減していた刺激とは違い容赦のない動き。

それが何度も繰り返されて折り曲がった指が跡をつけるように腸内を自在に角度を変えてひっかきまわす。

今までで一番指の動きが激しく腸壁への刺激も強い指責め、直人の口からはあえぎと一緒にヨダレが垂れ落ちてくる。

「これもイイ反応……と」

激しい指とは裏腹に冷静な表情で痴態を見つめながらユイカは淡泊に一言つぶやくとひとときわ強く指爪を食い込ませて、

「、おっ」

ズボッと素早く肛門から引き抜いた。

「おっぐっ、はあはあはあっ」

仰向けで股を広げたまま荒い呼吸を繰り返す直人、連続して行われた別々の指責めに思考が追いついてこない。

菊のすぼまりは指を抜いてすぐだというのに求めるようにヒクヒクとわなないていた。

まな板の鯉のように施シートチェア術台の上で寝そべる身体を見つめながらユイカが表情を変えずに口を開く。

「どう？ どの指が一番よかった？」

「はあはあ、えっ、えっ」と

(ど、どの指って)

立て続けに行われたアナルへの四本の指による責め。

はじめての体験、その愛撫は直人としてはすべてが衝撃的に気持ちがいいものだった。

ただキモチがいい――。

どの指での愛撫も強烈でそんなもの選べるどころかハッキリと頭で良さの認識すらできない。

「その、どれがって――あうっ」

わからない、直人がそう言いかけたとき、

「もう一回、これが小指」

まるで思い出させるようにニユルリと細い指がヒクついていた菊門からふたたび侵入してくる。

かき回すように入り口近くの肉筒が、かき回されて肉棒が勢いよく勃起してはねる。

(ああっ、ペニスがつ、勝手に動いてッ、き、気持ちいいっ)

指の小魚が自由に動くほどオスの欲望がビクビクとストレートにはじめていく。

その感覚はお尻からの異質な愛撫とはいえ、一番普段の欲情に近いものがあつた。

「あっこれがっ——「次は薬指」

「一番いいっ」そう伝える前に指が抜き取られると素早く次の薬指の抜き差しへと変化する。

ズチユズチユズチユ。

ローションの水音をたてながら容赦なく抜き差しされる薬指の刺激に、今度は陰囊の根元へ気持ちよさがうつつていく。

「あっ、あっ、あっ」

（だっ、ああっ、これもいいっ、特に睾丸なんか……）

まるで快楽が上書きされるように鈍いながらもズッシリとした溜まっていく心地よさにひたってしまう。

その快楽にもっと浸っていたいそう思った瞬間、指があっさりと撤退して、

「そして中指」

「あああ……」

ズブズブズブズブゥ〜とゆっくりとひねりをくわえながら存在感のある指がお尻の奥まで入っていく。

そのあとに待ち受けるのは、

「ああっ、あっ、おっおおおっ」

長い中指の第一関節を曲げての尻の奥をかき回すような腸壁の愛撫。

（こ、これえっ、このかんじっ、けつきよくこれがっ）

何かが目覚めそうになる慣れない奥への刺激、一番未知への期待が大きく臀部だけでオーガズムにいたれるのではないかと予感させられる。

羞恥をのぞけば、もしかするとこの感覚が一番——

「最後がこの人さし指」

勢いよく抜かれた中指、間入れずにすぐに人差し指が突っこまれる。

「、おっ」

腸壁、腸内に容赦のない強い刺激が走る。

しなやかな人差し指でまるで引っ掻かれるように爪をたてて刺激される。

小指以上に器用に動く指が爪を使って腸壁を引っ掻いていく感覚は、暴力的とすらいえる。

「こっ、だっ、おっ、おっ、おっおおっ、ん、」

痛み寸前、屈服してしまいそうになる快楽に言葉すら発せられない。

(あつだ、だめっ、こ、おおっ、なんっ、やばっ)

人さし指の先が、奥の手間まで差し込まれ横ヒダに爪が食い込んだ瞬間、ゾワゾワツとなにか変な不安が直人を襲った。

「!! ? なっ——」

いままでとは違う異様な感覚、不快に近い心理的な拒否感のようなものが、つそれがハッキリする前に指がズボツとふたたび抜きさられた。

(な、なについてまの——?)

何か感じたことのない嫌な予感。

快楽にまじってうまれた、感覚が人さし指の刺激がきっかけだったことは間違いない。

指の責めが終わったとたんその感覚は跡形もなく消えて安堵する。焦りと安心感、直人の額から一筋の汗が流れ落ちる。

彼のその様子を見つめていたユイカの鋭い視線が股間へと移動した。

男の人さし指を抜きさった、うしろの菊門。

そこはまるで何かを守るようにキュツとすぼまりを一瞬だけ強く引き締めた。

それをユイカは見逃さない。

何かを恐れたかのように閉じた肛門だったがしばらくして、指の気持ちよさを思い出してふたたびヒクヒクと動き出す。

股を広げたまま一瞬だけおびえるように閉じた尻穴。

その生理的な反応の正体を彼女は経験から知っていた——。

直人の中で起きた変化を察知したユイカだったが、当然それを教えるつもりもなく、なにごとくなかったかのように口を開く。

「……じゃあお客さん、さっきの質問に答えてどの指が一番よかった？」

「そ、それは……」

四本の指の愛撫、ふたたびその質問をしたユイカを見ながら直人は気持ちよさを思い出すように考える。

(けっきよく、よかったのは……)

ペニスへの気持ちよさに直結するようなくねらせた小指の甘い愛撫。

淡々と奥から陰囊へと快楽が積もっていくような薬指のストローク。明らかにお尻のみで感じさせられた味わったことのない中指の奥責め。理性が壊されるような腸壁を責められる暴力的な人さし指の刺激、そしてさっきの謎の不安感。

どの指も直人の知り得なかった新たな性の快楽を植え付けるような刺激、その中でも中指の奥を責める快楽は未知の期待がありもう一度して欲しいと思えた。

それに陰囊に響くようなジンワリとした薬指の快感も時間をかければすごいことになるように思えた。

人差し指の腸壁搔^かきは自身を見失いそうになるほどに強烈で正直不安すら覚える。

優柔不断な直人には、人さし指以外はどの指の刺激も捨てがたい。だがそれを踏まえて今の直人が選んだのは――、

「い、一番は小指がよかった、です」

正直なところ本当は奥を愛撫された中指だと言いたかったがやはりそれを堂々と言うには恥ずかしすぎた。

奥のアナル責め、慣れないソコを開発される羞恥には今はまだ早い気がする。

それに結局、人さし指の最後の不安をのぞいてすべて気持ちよかったことには変わらない。

そんな気持ちから直人は安易にペニスで感じる事ができた小指を選択した。

自らを偽ったそんな薄っぺらな選択が間違っていると気づかずに――。

シートチェアの上で股を開いた直人がそう答えると、ユイカは無表情のままゆっくりと指先を股間に近づけた。

「ふうん……」

ピアノの旋律を奏でるように四本の指が順に菊門を撫でていく。

小指、薬指、中指、そして――

ズンツと最後に撫でた指が肛門に入った。

「おっ」

「嘘つき」

低い言葉と同時に勢いよく侵入したのはしなやかに伸ばされた人さし指。それがすぐに腸内でかぎ爪のように曲げられる。

「おっ、お、おっお、やっ」

「ホントは中指か、」

ズボズボズボツと曲げた指が腸壁を擦りながらストロークを繰り返す。

「——この指、」

「やっ、そっ、だっおっ、んっ」

穴を広げるように指が出し入れを繰り返す。

「こうやって人さし指で掻いてホジられるのがよかつたクセに……」

肉壁に爪先が食い込むように曲がった指が動きながら刺激していく。

(あっ、な、なんでえっっ)

「ほぐしコースって言ったけど、」

器用に自在に手指を動かしながらユイカは冷ややかに言い放つ。

「——変更」

厳しい言葉同様に徹底的にかき回すようにお尻の中で人さし指が暴れまわる。

「だっ、んおっおっおっ、ぐうっ」

「嘘ついた罰、もっといっぱいナカを掻くから……覚悟して」

甘い気持ちで手軽な快樂でごまかそうとした直人に、断罪の言葉と真実を教え込むようなキツイ尻掻きがおこなわれる。

ユイカはお尻に指を入れてギョルギョルツと回しながら仰向けであえぐ直人に顔を寄せていく。

ユイカのマスクが耳にくっつくほど近づいた、お尻の中で指が止まり、

「ほら、下半身に力が戻ってくる……」

耳元で低い声がささやかれると、直人の足から腰がビクビクと跳ねるように動き出した。

「もう、勝手に動かしているから」

「おっ、おっ、あっ、う、うごっ」

まるで洗脳から解けたように腰から下が踊りだす。

「ゆ、ユイカさ、っんっ」

止まらない下半身のふるえにおびえるように至近距離にいるユイカを見ようとした直人の耳が湿り気を帯びた。

「……はあ、ほら自分の意志でヒザたてて腰をあげて」

甘い吐息が耳にかかり、これまでとは違うしつとりとした口調の言葉。

「あつ、は、はいい」

まるでお願いでもされたような甘い口調に、直人は自らヒザをたてて腰を浮かせてしまった。

ガクガクビクビクとふるえながらも指をくわえたままお尻を持ち上げている。

同時にブブブブッと下から機械音が鳴って、リクライニングチェアの脚の部分が少しずつ角度を変えて上がっていった。

（あ、あ、い、椅子がっ）

追い打ちをかけるようにユイカが空いた手で椅子のリモコンを操作してヒザ上げ機能を傾けた。

それによりタダでさえ持ち上がった腰がさらに上を向いていき、背中を起点に股間が仰け反っていく。

足を広げたままお尻の穴を上に向ける恥ずかしい格好。

男がするにはあまりにも羞恥極まりない姿勢になってしまい、直人は声もだせずに真っ赤に顔を染めた。

足の間からのぞき込むように見つめる女の顔、その顔からはいつの間にかマスクが外されていた。

ただ天井の照明から差し込む桃色の光を背景にユイカの顔に影がおちておりあまり素顔がわからない。

タダでさえ読み取れない表情が薄ぼんやりとしか見えない。

それでも美人であるということだけは、やはりなぜか認識できた。

まるで時間が止まったかのようにお尻の指を入れられた直人はジリジリとした沈黙に焦らされる。

(こ、これこのまま……)

次に何が起こるのか、いや何をされてしまうのか期待と不安のまじったな
んとも言えない気持ち。

すべては目の前に立って見つめてくる無表情の女次第だった。

ゆっくりと彼女が口を開いた。

「好きなコトも素直に言えないって、」

大きく腰を浮かされたことにより、奥まで入れやすくなった牡の穴。

ジワリジワリとあえて感じさせるようにお尻の人さし指が角度をつけて奥
まで進んでいく。

「あ、あ、あああ」

そして指が限界まで到達するとフック状にゆっくりと折り曲がった。

「——かわいいそう」

「、あっ」

哀れむような言葉とは裏腹に声に抑揚はなく感情が乗っていない。

ただ直人の意識は言葉よりもお尻のほうに集中せざるを得なかった。

ユイカの細いしなやかな人さし指はお尻の裏側、尾骨の付け根を中からひ
つかくようにカリカリと刺激してくる。

直人は気がつかなかったがそこにはあるポイントが存在していた。

男慣れしたユイカが気がついたオスが生理的におびえて隠した場所。

「あっ、あっ、あっ、おっ、おっ、おっ」

最初こそ、その刺激は小刻みで弱いものかと思えたがすぐに勘違いだと気
づかされる。

素早く執拗に同じ場所を狙ったように爪先をたてて搔か^かれる。

開いた足が電流を受けたカエルのようにビクビクと動きまわり、快感が下
半身全体に広がっていく。

「おっ、まっ、そこっ、だあっ」

一点集中の腸壁ほじり。

直腸の奥の手前にある横ヒダにピンポイントで爪が食いこみ搔か^かれていく。

(そ、そこはっ、だっ、や、ヤバっ)

届いたその場所は先ほど、ゾワゾワと嫌な予感を抱かせた——、「ちがっ、そこっ、まっえ、くだっ、あっ、おっ、おっ、おっ」クールな表情で見下ろしながら、人さし指一本でチェアシート上の男を悶えさせる女。

あえぎながら両足が暴れる、その股の間から見つめる目はまるで男の限界を見極めているように冷たくすんでいた。

「……さっきはココが一番感じてた」

刺激されまくった腸壁の中でも、あきらかに感じ方が違ったポイント。

快感とは別の異様な感覚。

（あっ、まずっ、これっ、っば、バレてっ）

あの一瞬で彼女に見抜かれており、この刺激を続けられるとどうなってしまうのか——、

カリカリカリッとゴム手が破れるのではないかというくらい爪をたてながら徹底的にまずいトコロを搔かいてくる人さし指。

その容赦のない刺激についてゾクゾクゾクッと尾骨近くから原始的な欲求がわきあがってきた。

「あっ、まっ、やめっ!!、おっ、ゆ、ユイカさんっ、そこだけはっ!」

執拗な責め、止まない指先の動きに直人は拒否感を訴える。

「ほっ、ほかっ、他の指でっ、お、おねがっ——っだっ」

「駄目、嘘をついた罰」

必死な形相で懇願する男の言葉をにべもなく断るユイカ。

指だけで男をここまで追いつめる行為にもまったく彼女には感情の揺れが見られない。

（あがっ、ホントまずいっ）

こすられる腸壁の奥からジュワリとわいてきたのはなじみのある生理的な欲求。

性感や快樂などという生やさしいものではなく、絶対にこんな時に感じてはいけない欲望、

——排泄欲だった。

いわゆるチンぐり返しの体勢でお尻を責められる状況は、まるで指に尻からつり上げられているように見える。

その状態でお尻の奥、下腹部あたりではグルグルと嫌な音が鳴っていた。「ユイカさんっ、だめええっ、指を抜いてくださいっ、ああっ」

「どうして？」

直人の顔からよくない汗が噴き出してくる。

まったく表情を変えずにたずねるユイカに思考がかき乱される。

（こ、この人はくっッ）

「ほ、ほんとつに、このままじゃヤバいですっ、てっ」

「なにが？」

怒りと焦り、不安がない混ぜになりもどかしさがあふれそうになる。

それをあざ笑うかのように人さし指がカリッカリッと刺激する。

「やめっ、とめっ、ううっ、で、でそうっ、も、もれるうっ」

「…だからなにが？」

お尻に指を入れられて焦る男に対して平然と聞いてくる態度、もはやわかっついていて聞いているのは明白だった。

（あがっ、だっ、あ、アクマ、悪魔だこの人ッ）

なんとなくわかっていたが、この状況でハッキリとユイカがSな女性だと身に染みてくる。

最初に思ったクールで実は優しいそんな生やさしい女性ではなかった。

うっすらと後悔の二文字が頭に浮かぶ。

だが今はそんな事を考えている余裕などなかった。

腸の奥からあれが迫ってきているのだ。

「うっ、うっ、う」

「ッうッなに？」

「ううう」

言わせたい言葉はハッキリしている、だがこれを言っちゃうとよくない一線を越えてしまうような気がする。

「うぐっ、おっ、もっ」

だが彼女の指は容赦せずに先を促してきた。

「言って？」

何かを捨てて羞恥を押し殺して素直になるしかない、じゃないとこの体勢

でとんでもない事態になりかねない。

だけでも——、

「……言いなさい」

耳に冷たい言葉が響くと、躡けるようにグリッと強めに直腸の奥を指爪が引っ搔いた。

「くくっつ、う、う〇ち、うん〇ですつううつも、もれる早く、指をお意地悪い爪先の追撃についてそれを言ってしまう。

いい大人が聞きたくも聞かされたくもない羞恥極まりない告白。

だがそんな言葉にもユイカの反応は淡泊なものだった。

「あつ、そう」

意を決してもらした告白をアツサリと受け流して言葉を続ける。

「じゃあ抜くけど、ここでは出さないで」

他人事のように。

本来なら腹立たしいことこの上ない態度だが今の直人にそんな事を思う余裕はない。

コクコクコクと必死で首をたてにふる、もはや一刻の猶予もなかった。

「言っておくけどシートで排泄したら、……絶対に許さないから」

大人が子供を注意するような毅然とした口調、静かで堅い絶対の忠告。

“排泄するな”

それが嫌でも直人にこの場がサロンの施術椅子の上だということを思い出させた。

「わ、わかったから、も、っ、早くぬ、抜いてくださいいっ」

直人の恥ずかしい告白を聞いてから、さすがに指の動きは止めてくれた。人さし指は中でいつでも抜き出せるようにまっすぐ伸びて待機している。

それでも腸内はジワジワッと圧迫するように催してくる、下半身を上に向けた体勢がなんとかそれを押しとどめていた。

「は、はやくっ、手洗いっ」

「トイレわかる？ 入り口から出てすぐ左」

必死になった直人の危機が伝わったのか、彼女なりの親切なのか落ち着いた声で手洗い場を教えてくれる。

「は、はいっ」

たぶん洗面台があるその先だろう、来るときになんとなくドアが見えた。とりあえずお尻を引き締めて一目散に駆け込まなければならぬ、そこまではなんとか耐えるしかない。

成人した男がこんな子供のような真似をしなくてはいけないことに屈辱を覚える。

だが今はそれどころではない、とにかく漏らす前に――、

「じゃあ抜くよ」

ポツリとそうつぶやいたユイカに直人は準備するように浮かせた足を軽く動かす。

（自分で動かせる、大丈夫歩けるっ！）

足が動くことを確認すると頭の中でベッドから降りて素早くトイレへと駆け込む姿をイメージした。

なんとかかなりそうだと思えた瞬間、お尻の奥に衝撃が走った。

「、お、お、っ――」

ユイカの人さし指がフックのように曲がり、これ以上なく深く腸壁をえぐった。

ズボボオオオオ。

釣り針のように返しをつけた状態でゆっくりと指が抜かれていく。

「、おっ、おっ、おおおおおっ」

気のせいか汗でにじんだ視界に、桃色の唇の端が微かにつりあがっているように見えた。

ぞっとするような悪意を人さし指から感じとってしまう。

（、これっ、だっ、だまっ、やられっ、た、もれっ）

ズボッと肛門が盛り上がるほど曲げた指が抜かれた瞬間、まるで自分が排泄してしまったかのような錯覚に陥った。

だがそれも一瞬ですぐに追いかけてくるように、お腹からグルグルと圧迫

感が迫ってくる。

「だっ、すぐっ、」

(い、いどうっしないっ)

なにも考えている暇はない、指が抜けたお尻の穴をギュウウツとなんとか閉じると足を横へと移動させる。

走って行きたいがそれをすれば漏れてしまうという確信がある。

急激に波が来る便意は何かの拍子に出てしまいそうなほどキツイ。

とにかく何かの衝撃でもれないようにと慎重にベッドから片脚を下ろす。足を下ろしたことにより重力からお腹の異物感が一気にお尻へと迫ってくる。

(だっ、まっ、まっ、あっ、ああっ)

片脚そしてもう片脚をそろっと順にベッドから床につけた時に、^{もよお}催しは一気に肛門へと差し迫っていた。

曲げたまま抜かれた人さし指が通った場所を、本来の異物感がジワジワと進行してくる。

自力で腸壁をすぼめることができない、今までタップリとほぐされたアナルが仇となっていた。

いやむしろそれこそが最初から彼女の仕込みだったのでは――、

部屋の入り口まで数歩、トイレのある場所までとても耐えられるとは思えないくらい強烈な便意がおそう。

ベッドの縁^{ふち}に手をかけてプルプルとふるえる足をすり足のよう動かしながら移動を試みる。

腰を折りお腹を押さえながら数センチずつ進むように動く。

だが、

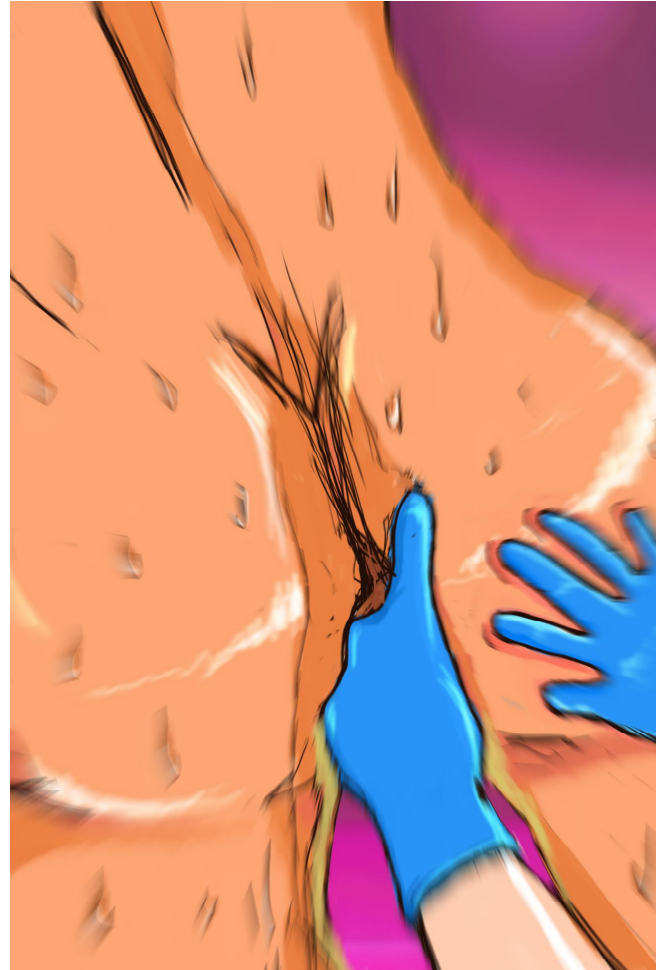
(あっ、もうっ、だっ、ああっ、やっちやうっ、もらすっ)

顔から汗がポタポタと落ちて、全身の汗と一緒に絶望があふれだした。

(もれちやう、もらしちや、)

もはやこの場所です――、

ズボッ



「漏らすな」
鋭く冷たい声。

「~~~~~つつつつつ!!」

決壊寸前の肛門に勢いよく何か突き刺さり、直人の脳が真っ白に発した。

後ろを振り返るまでもなく、指がお尻の穴をふさぐように貫いているのがわかる。

「つつ! つ~~~~んっお、おお~~~~」

口のヨダレと一緒にあえぎ声ももれてくる。

直人は顔中から汗と涎を垂らしながらおそるおそる首を後ろへと向ける。

そこにはお尻を突き出すように向けた直人に、しゃがみ込んでゴム手袋をした指を二本束ねてカンチョーをする女の姿があった。

表情こそわからないが、その目は直人を見据えている。

二本の指が根元までシッカリとお尻の穴に埋まっております、

「、おっ、おっおっおっ」

お尻から異物が逆流でもしているかのようにジワァ〜ッと熱が上がってくる。

衝撃から抜ける間も与えられず、焼けるような腸内のしびれが股間全体に伝播していく。

「聞こえてないの？ ……言ってるでしよ漏らすなって」

綺麗な姿勢で指カンチョーを極めたユイカが、怒りとあきれのまじった声でつぶやくと、あいた片方の手を股間まへへと伸ばした。

細い指がヒクヒクと跳ねる肉棒のカリ首をつまむ。

あまつた皮を巻き付けるように人差し指と親指でつねると視線を向けた。

「……これ何？」

トオロオオ〜ッ

粘り気のある液体が真っ赤な亀頭の先からあふれだしている。

強調するように包皮をつまんだ指。

そのさきからトロオ〜リともれてくる液体は無色透明のように見えた。

ユイカの視線がペニスと顔を往復する。

ようやく直人は彼女がどこで、どこ漏らすな”と言っているのか理解する。

するとお尻から伝わってきたしびれがそのタイミングで肉の棒へと流れこんだ。

「おっ、おっ、おおおんっ」

「何？ ……お漏らし、許してないけど？」

そうつぶやいたさきから、白く濁ったものがまじって垂れ落ちてくる。

ドロ〜ッと粘着が増して糸のように引いていたそれが途切れしずく滴状へと変化した。

排便しそうな状況から指でアナルにカンチョーを決められた。

その事実を受け入れる暇もなく混乱した下半身はユイカの指に屈服して、今度はだらしなくペニスから吐精をはじめていた。

その現実を——、

「……指で浣腸されて精液漏らしたな？」

(ああ〜〜つまたもれるう)

しっかりと指摘される。
指でつままれていたペニスがビクンッとはねるとドップドプと白い液体があふれた。

ポツリとつぶやいた一言でハッキリとわからされる。
もう戻れないほどのヤバい何かを味わってしまったのだと。

お尻に指を差し込まれたまま中腰でガクガク下半身をふるわせていると、
「……指を抜いたらキミ、うんちまで漏らすでしょ？」

ユイカから、まったく恥ずかしげもなく医務的にすら聞こえる冷めた質問がされる。

「っ、あ、っ、っは、はい」

羞恥から顔を真っ赤にしながら、直人は素直にうなずいた。

彼女の言うとおりの場で指を抜かれたら、男としてのすべてが終わってしまう。

「……いいよ、じゃあこのまま入れた状態でトイレまで行こうか」

「うっ、うつつす、すみまつ——」

決して直人を貶めるような言い方ではない。

そのまま業務をこなす女医のような口調がむしろ男の羞恥をあおり立てていた。

「いいよ別に、付いていくから自分のペースで歩きな」

同情のかけらもないすました口調。

「ううっ、はい」

直人はお尻の間に指を入れられたままヒョコヒョコと歩き出す、もはや介護とすら呼べる情けない醜態にうなだれる。

会話からも二人の関係性は今や戻れないものになりつつあった。

ポタポタポタッと、

歩くそばから股の間、垂れたペニスから少量の精液が垂れて床に小さな白い溜まりをつくっていく。

「……コッチは漏らすの止められないの？」

「ううっ、は、はい、」

焦れたもどかしさがなんともしがたい吐精、味わったことない初めてのお

漏らしにペニスのコントロールが効かなかった。

「ふうん……」

関心がなさそうにユイカがつぶやく、ただ床にたれる精液を視線はしつかりと追っていた。

体験版はここまでとなっています。

気になった方はぜひ本編をお買い上げお願いします。

式 フロン